

リチャード・ポッターの6鍵式フルート

● 鈴木 暁

1. モリエール作品の貴族

モリエール (Jean-Baptiste Poquelin, dit Molière, 1622-1673) の笑劇『才女気取り』(*Les Précieuses ridicules*, 1659) に次のような台詞がある。

身分ある者というのは、何も習わなくとも、何でも知っているものなのです (第9場)。

マスカリーユ侯爵は、音楽を習ったこともないのに、披露したばかりの即興詩に節をつけて歌うと言う。引用は、それを聞いて驚く才女カトーに対する侯爵の返答である。同じような台詞は、同じくモリエールのコメディ・バレエ『町人貴族』(*Le Bourgeois Gentilhomme*, 1670) にもある。ダンスの先生と音楽の先生に「ひとから教えられたまったくもって素晴らしい」俗謡を披露し、ダンスの先生に「お上手ですなあ」とおだてられたジュールダン氏が「音楽なんか習ったこともないんですぜ」と自慢する場面 (第1幕第2場) である。

一方は、おのぼりの才女気取りに赤っ恥をかかせようという猿芝居のために、下男が変装した偽の侯爵。他方は、貴族に憧れる成り上がり町人。要するに喜劇の台詞である。しかし、たかが劇と侮ってはならない。「風俗を描く画家」と称されたモリエールのことである。「何も習わなくとも、何でも知っている」など、確かに誇張はあろうが、まったくの虚像でもない。

一七世紀前半のフランスでは貴婦人のサロンが発展するが、その花形楽器はリュートであり、摂政のマリ・ド・メディシスやルイ三世、さらにはリシュリューまでが、その習得に励んだ⁽¹⁾

のである。すなわち、王侯貴族の嗜みとして音楽の演奏が流行したが、そこで奏でられた楽器がリュートであり、王までもが習ったというのである。その他にも流行したフルートやハープ、そして宮廷バレエも王侯貴族にとっては一つの「素養」なのであった。

2. 王侯貴族の音楽

ある『国語辞典⁽²⁾』によれば、「素養」とは「ふだんから努力や訓練をして、身につけている教養や技術」であり、「教養」とは「学問・知識などによって養われた、豊かで広い知識」であるが、ここでは「素養」とは「持って生まれた才」と定義したい。すなわち学問や学芸のように知識や技芸によって得られた後天的な能力ではなく、天与の才であり、王侯貴族の資質と考えられるものである。

磯山が挙げる以外にも、周知のようにルイ十四世 (Louis XIV, 1638-1715、在位1643-1715) は宮廷バレエの名手であったし、フリードリヒ大王 (Friedrich der Große, 1712-1786、在位1740-

1786) やルードルフ大公 (Rudolf Johannes Joseph Rainer, Erzherzog von Österreich, 1788-1831) に至っては音楽史にも名を残す優れた奏者であり、演奏だけでなく作曲も行い、今でもその曲を聴くことができるほどである。フリートリヒ大王は当代切つての名フルート奏者クヴァンツ (Johann Joachim Quantz, 1697-1773) にフルートを習い、C.P.E. バッハ (Carl Philipp Emanuel Bach, 1714-1788) をチェンバロ伴奏者として、しばしば演奏を披露した。ルードルフ大公は、ベートーフェン (Ludwig van Beethoven, 1770-1827) にピアノと作曲を習い、ピアノもかなりの腕前であったと伝えられている⁽³⁾。また、必ずしも音楽史上の人物とは言えないが、ハープの流行を生み出したと言われているマリー・アントワネット (Marie Antoinette, 1755-1793) は、終の棲家となったコンシエルジュリーにまでハープを持ち込むほど、この楽器をこよなく愛した。そしてそのマリー・アントワネットが作曲した曲も現存しているのである⁽⁴⁾。

とはいえ、これら歴史上の人物の演奏やダンスは、今となっては再現することはできず、何も正確なことはわからない。記録はいろいろと残っていたとしても、相手が相手だけにどこまで客観性があるかわからない。楽譜が残っている場合もあるが、曲の完成に際して、作曲の手ほどきをした者など、他人の手が加えられてある可能性も十分に考えられる。

3. モーツァルトとフルート

ところで、モーツァルト (Wolfgang Amadeus Mozart, 1756-1791) にはフルートのための作品が何曲もあり、そのいずれもが彼特有の美しいメロディで人気も高い。中でも『フルートとハープのための協奏曲』ハ長調 K299 (K297c) (*Konzert in C für Flöte, Harfe und Orchester KV299 (297c)*) (以下『協奏曲』と略す) は、明るく煌びやかなフルートの音色と大海のうねりのようなハープの旋律が見事にとけあった名作である。モーツァルトの身近には、「当代随一のフルート奏者⁽⁵⁾」ヴェンドリンク (Johann Baptist Wendling, 1723-1797) がいたが、この曲はフルートを嗜むギーヌ侯爵 (Adrien Louis de Bonnières, Comte de Souastre puis Duc de Guisnes, 1735-1806) とハープを巧みに弾くその娘のために作られた曲である⁽⁶⁾。従って、この曲を検討することは、ギーヌ公父娘、ひいては当時の王侯貴族の音楽演奏の実力を知る一つの手がかりとなろう。

前述のごとく、フルートの名作を何曲も書いたモーツァルトであるが、不思議なことに、フルートが大嫌いであったとも言われている⁽⁷⁾。その理由を前田りり子 (1972-) は推測して、

モーツァルトは自分の完璧なアイデアをフルートという制限の多い楽器のために変更しなければならぬことが、そして音程のとれないアマチュアによって自分の美しい音楽が壊されることが「我慢できなかつた」のかもしれませんが。

確かに (……) 二流オーケストラのフルーティストや、アマチュア奏者のフルートの音程は相当ひどかった⁽⁸⁾

と書いている。註釈を施したように前田のアマチュア批判はまったく的を射ていないが、それでも「フルートという制限の多い楽器」とはどういうことであろうか。

4. フルートの歴史——トラヴェルソとモダン・フルート

現代のフルートは、バーム (Theobald Böhm, 1794-1881) が1832年に考案し、1847年に特許

を取得した、いわゆるバーム式フルート⁽⁹⁾（あるいはモダン・フルート）である。それに対して、例えば大バッハ（Johann Sebastian Bach, 1685-1750）に代表されるバロックの時代には、モダン・フルートとは異なるトラヴェルソと呼ばれるフルートが使われていた。すなわち、フルートは時代と共に変遷を重ねてきたのである。モダン・フルートの最低音はC（もしくは半音低いH）である（これをC管、もしくはH管のフルートと言う）が、一般にトラヴェルソの最低音はDである（これをD管のトラヴェルソと言う）。従ってD管のトラヴェルソでは、Cまで音域のあるモーツァルトの『協奏曲』を吹くことはできない。またD管のトラヴェルソは音程が確かではないために、五度圏の図⁽¹⁰⁾で、D-durから遠い調は演奏が難しくなる。フルート曲で最も重要な大バッハの『無伴奏フルート・パルティータ』BWV1013や『フルートとチェンバロのためのソナタ』BWV1030はそれぞれA-durとb-mollであるので、トラヴェルソでも吹きやすい調と言うことができる。

そのバッハの没した1750年を音楽史ではバロックの終焉（始まりは1600年である）としているから、1778年に書かれたモーツァルトの『協奏曲』は、バロックの終焉からモダン・フルートが特許を得られるまでの間に書かれたことになる。前述のように、この曲はD管のトラヴェルソでは吹けないし、音域のあるモダン・フルートはまだ存在しない。一体どんなフルートで吹かれていたのであろうか。

5. フルートの歴史——多鍵式フルート

バロック時代のトラヴェルソは、ルネサンス・フルートと同じ6つの穴に加えて、右手（もしくは左手）の小指のための鍵を一つつけた1鍵式である（2鍵式のものもある）。そして、時代が進むに従って、音域を広げたり、特に半音階のようにトラヴェルソでは吹きにくかった音程を安定させるために、鍵の数も4、5、6、8、10鍵等と増えた多鍵式フルート（クラシカル・フルート、ロマンティック・フルートとも言う）が考案される。すなわち、先に「フルートは時代と共に変遷を重ねてきた」と述べたが、トラヴェルソからモダン・フルートに至る間にも改良⁽¹¹⁾が加えられていたのである。そしてモーツァルトが『協奏曲』を書くに当たって念頭に置いていたのが、ポッター（Richard Potter, 1726-1806）の6鍵式フルートであると言われている。

6. ポッターの6鍵式フルート——概要

本稿末に参考資料として画像を載せたのは、筆者所有のポッターの6鍵式のクラシカル・フルート⁽¹²⁾である。これは刻印からリチャード・ポッターにより1785-1806年に作られた楽器であることがわかる。モノクロの画像のためによくはわからないが、黄楊の本体に管の接続部分は象牙で、鍵は銀製である。フルートの製作者にポッターは何人かいるが、初代リチャード・ポッターはトラヴェルソに革新的な改造を施し、18世紀末から19世紀のフルート製作に非常に大きな影響を与えた伝説的なフルート製作者であった。

18世紀中庸までのトラヴェルソは通常1鍵式のD管であった。18世紀後半にはカヒューザック（Thomas Cahusac, Sr., 1714-1798）やグレンザー（Carl Augustin Grenser, 1757-1814）などの製作者により4鍵式の楽器、そして6鍵式のC管が製作される。ことにリチャード・ポッターの6鍵式C管フルートは評価が高い。1785年、ポッターはフルートに大きな改造を施し、特許を取るようになる。その新式フルートの仕様をまとめると、以下のようになる。

- ・高音の発音が容易な内径
- ・頭部管のチューニング・スライドを抜き差しすることにより半音近くピッチを上下させることができる
- ・スクリュー・コルク：頭部管のキャップを回すことにより、コルクの位置を変えることができる
- ・ピューター・プラグ・キイ：従来の革のパッドではなく金属プラグが使用される
- ・C管

これらの改良によりポッターのフルートは絶大な人気を博し、イギリスのみならず全ヨーロッパで使われるようになった。

7. 筆者所有のポッターの6鍵式フルート

それではポッターのフルートを見てみよう。モノクロの画像でわからないが、黄楊製なので、将棋の駒のような色である（前田、前掲書や註（12）に紹介したサイトでカラーの画像が見られる）。象牙は黄ばんではいるものの、古い楽器に見られる割れは一切ない。モーツァルトの『協奏曲』がポッターの6鍵式フルートを念頭に置いて書かれたと言っても、筆者所有のこの楽器自体は『協奏曲』以後に製作されたものである。従ってこの楽器とモーツァルトとの関わりは不明であるが、モーツァルトの生前に作られた可能性もあり、歴史の重みを感じさせる楽器である。

歴史の重みは感じさせるが、実際に手に取ってみると、その軽さに驚かされる。筆者の所有するモダン・フルートにルーダル・カルテの木製（恐らくはコーカスウッド製）ヴィンテージ・フルートがあるが、これは頭部管の内部に金属管が入っている上に、楽器全体が太く、例えば、同じく筆者の所有する名器ヘルムート・ハミツヒの総銀製のフルートよりも重く感じられる。もっとも、クラシカル・フルートとモダン・フルートは、素材も構造も何もかも異なるし、ルーダル・カルテは、20世紀の大編成のオーケストラでも使用される⁽¹³⁾ほど音量も表現力も豊かであるので、同じ木製とは言っても、バロックやクラシカルのフルートとはまったくの別物である⁽¹⁴⁾。

では、息を入れてみよう。画像を見てわかるように、6つの穴を指で押さえて吹くのであるが、穴と穴の間隔が広く、正しい位置に指を置くのは慣れが必要である⁽¹⁵⁾。音色に関しては、筆者はトラヴェルソを吹いたことはなく、耳で聞いたことしかないが、その限りにおいては、トラヴェルソの音は弱く小さく、またモダン・フルートほど音量が一定しておらず、絶えず揺れ動いているように聞こえた。一言で言えば、頼りない音、というのが第一印象であった。ポッターの場合も、基本的には同じような音を想像していたのである。しかし、指を正しい位置に置いて、静かに息を吹き入れて実際に音を出してみると、繊細ではあるが、かなりしっかりとした音を発する素晴らしい楽器であった。どちらかというところ、トラヴェルソよりも、モダン・フルートに近い音であり、これなら現代のオーケストラ（無論小編成である）とモーツァルトの『協奏曲』を吹いても、それほど違和感はないのではないだろうか。

8. ポッターの6鍵式フルートとモーツァルトの『協奏曲』

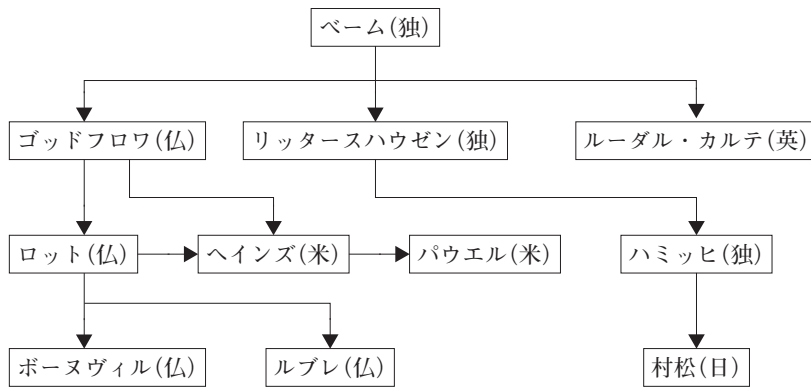
それではポッターを使ってモーツァルトの『協奏曲』を吹いてみよう……、と言いたいところ

だが、残念ながら筆者の実力では到底この曲を吹くことなどできない。トラヴェルソや多鍵式フルートの運指は、モダン・フルートのそれとは異なるので、筆者にはよくわからないが、恐らくポッターの6鍵式フルートで吹くこの『協奏曲』は、モダン・フルートのときよりも更に難しいものであると思われる。その上広い音域に音が飛ぶこと、モダン・フルート以前には苦手な半音階こそ少ないものの、早いパッセージもあることなどから、アマチュアとはいえ、この曲を吹きこなしたギーヌ侯の実力は相当なものであったことは間違いない。

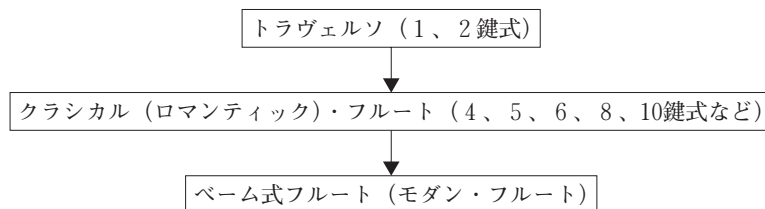
貴族社会のサロンで演奏されたモーツァルトの『協奏曲』、それはどれほど華やかな舞台であったことだろう。今となつては映画やドラマの中で不十分に再現されるしかない世界であるが、17世紀のフランス文学を専門とする筆者ですら思いもよらず、恐らく現代人の想像力では思いもつかないような豪華絢爛な世界であったことだろう。今後筆者としては、他の多鍵式フルートやモダン・フルートとの吹き比べでこの『協奏曲』に臨んでいきたいと考えている。

註

- (1) 磯山雅『バロック音楽鑑賞事典』講談社（講談社学術文庫）、2007年、143ページ
- (2) 大野晋・田中章夫編『角川必携国語辞典』角川学芸出版、平成22年第11版（平成7年初版）
- (3) 武内寛海『音楽史の休日——見落とされたエピソード——』音楽之友社、昭和53年第12刷（昭和47年第1刷）21-27ページ
- (4) 例えば、佐伯真魚『マリーアントワネット曲集～王妃様の作った愛の歌～』中央アート出版社、2010年
- (5) 前田りり子『フルートの肖像 その歴史の変遷』東京書籍、2006年、185ページ
- (6) 吉田秀和編訳『モーツァルトの手紙』講談社（講談社教養文庫）、1991年、130-131ページで、この父娘が巧みに楽器を演奏することが書かれている。また、後述の通り、フルートは時代と共に変遷を重ねてきたが、同じことはハープにも言える。現代ではモーツァルトの『協奏曲』は、通常ダブル・アクションのペダル・ハープによって演奏されるが、モーツァルトの時代には、まだダブル・アクションのペダル・ハープはなく、シングル・アクションであった。そのために演奏できる曲や調性に限りがあった。筆者はハープについては何も知らないので、詳しくはエレヌ・シャルナセ、フランス・ヴェルニヤ『ハープ リュート ギター』白水社、1972年、銀座十字屋(<http://www.ginzajujiya.com/>)、高田ハープサロン (<http://www.takada-harp.com/>)等のホームページを参照のこと。
- (7) ニール・ザスロー他編『モーツァルト全作品事典』音楽之友社、2006年、196ページ
- (8) 前田『前掲書』、188-189ページ。本書は、写真資料が豊富でフルートの歴史に詳しい。しかしゴッドフロワ (Vincent Hypolite Godfroy, 1807-1868) やロット (Louis Lot, 1807-1896) の年代が怪しい（【口絵15】や271-272ページ等）上に、「プロ」と呼ばれる自惚れから、引用文にあるように、モーツァルトの時代の「アマチュア」に対する露骨な差別表現がある。しかし、ギーヌ侯の例もあることから、前田のアマチュア批判はまったく当たらない。そもそも音楽家が王侯貴族等のパトロンから独立して、自らの意思で音楽活動を行っている現代とは異なるこの時代に、アマチュアという概念を持ち出すこと自体、時代錯誤も甚だしい。
- (9) ベーム式フルートの流れを簡単に図示すると、次のようになる。これについては、筆者の所有楽器を中心に、稿を改めて書いてみたい。



- (10) 石桁真礼生他『楽典』、音楽之友社、2007年（新版第21刷、1965年第1刷）、112ページ
 (11) 簡単に図示すれば、



となる。

- (12) 以下、リチャード・ポッターの6鍵式フルートについては、古楽器／ギター演奏家竹内太郎 (<http://www.crane.gr.jp/tarolute/>) による。なお、18-19世紀のフルートについては、前田『前掲書』以外にも以下のサイトが詳しい。
 Rick Wilson's Historical Flutes Page (<http://www.oldflutes.com/index.htm>)
 バロック木管図書館 (<http://woodwind.at.webry.info/>) の中の http://woodwind.at.webry.info/201209/article_2.html も参照。
 リチャード・ポッターについては、
 Antique and Handmade Flutes by David and Nina Shorey (<http://www.antiqueflutes.com/index.php>) の中の <http://www.antiqueflutes.com/product.php?id=823> もしくは <http://www.antiqueflutes.com/product.php?id=962> を参照のこと。
- (13) ルーダル・カルテの木製フルートは、長い間フィルハーモニア管弦楽団の首席フルート奏者を務めたモリス (Gareth Morris, 1920-2007) が愛用していたことで知られている。
- (14) 従って、例えばバロック時代のフルート作品を、トラヴェルソではなく、木製のモダン・フルートで吹いても、その作品を十全に表現できるわけではない。
- (15) 筆者は学校の音楽教育でアルト・リコーダーを吹いたことはなかったもので、初めてアルト・リコーダーを手にしたとき、小学校で盛んに吹いていたソプラノ・リコーダーと比べて、穴と穴の間隔がかなり広くて吹くのに慣れを必要とした。初めてポッターのフルートを手にしたとき、穴と穴の間隔が広がったために、そのときのことを思い出した。

参考資料



【筆者所有のリチャード・ポッターによる6鍵式クラシカル・フルート（写真は竹内）である。写真一番上
が右手管と足部管を接続したもので、写真真ん中は左手管である。写真一番下が頭部管で、右側三分の一ぐ
らいのところの内径が見えているが、右の樽状の管がピッチを変更させるために抜き差しのできるチューニ
ング・スライドである。なお写真一番上の両端と一番下の右端に白っぽいリング状のものが見えるが、これ
が象牙である。】



【同上。4管をつなげたものである。】